

CHUOH TRY+ANGLE

知っ得通信

2009年4月20日発行 編集・発行：中央教育研究所(株) 〒732-0811 広島市南区段原2-15-5 <http://www.chuoh-kyouiku.co.jp/>



感情の論理 vol.26 「案内文の作り方」

前回に引き続き、「案内文の作り方」実践編です。

前は「見出し」の重要性についてお話ししました。今回は「本文」についてお話しする予定でしたが、「つかみ」の重要性について続けたいと思います。年末年始の番組で興味深い話を聞きました。ある漫才師? (済みません、お笑いに疎くて、それが誰か分かりません。) が、話していた内容です。

大阪の吉本興業が東京の浅草へ進出したときのことで、あの吉本興業が浅草に小屋 (ホールのこと?) を出すということで、東京の漫才協会? にとっては黒船来襲のような出来事です。対策に右往左往しているところへ、吉本興業から業務協力の呼び掛けがありました。「上手いこと言って、東京の漫才協会を呑み込むつもりだ」と幹部連中が身構えているところに、吉本興業の担当者がやってきます。そして、開口一番言ったそうです。

『皆さんは舞台の上で死にたいと思いませんか?』

その担当者の話はこうです。

最近の風潮として、テレビの中で短いネタで笑いを取ることが、売れる最短コースだという考え方が、若手に蔓延している。確かに、テレビの影響力は大きい。しかし、それに頼りすぎると使い捨ての芸人を次々と生むことになる。我々は、舞台の上で15分、30分とお客さんと向き合って、芸を披露し、通用する (あなた方のような) 本物の芸人を作っていきたい。そのために芸所浅草に進出を決めた。ぜひ、日本の芸能を守り、発展させるためにご協力をいただきたい。

この熱弁に、還暦を過ぎた東京の幹部漫才師たちは深く頭を下げ、「よろしく願います」と言ったそうです。

この吉本興業の担当者は只者ではない。第一声の台詞が素晴らしい。多分、この一文で居並ぶ東京漫才師の心をわしづかみにしたことでしょう。

年老いた?漫才師の気持ちになって下さい。世の中は「お笑いブーム」で、昨日今日この世界にやって来た若者が、たいした芸もないのに脚光を浴び、もて囃されている。自分は何十年も「客」を前にして芸を披露してきたプライドがある。しかし、そうした若手芸人 (その大多数は吉本興業所属) に対するジェラシーもある。まあ、複雑な心境であることは想像に難くありません。この吉本興業の担当者は、ズバリと老漫才師たちの気持ちを代弁したのです。

『皆さんは舞台の上で死にたいと思いませんか?』

このセリフほど老漫才師達のプライドを満足させ、かつ、彼等本人達も気付かなかった本音・欲求を言い当てたものはないと思います。

『そうだ、俺達は常に現場にいることが誇りであり、舞台の上で死ねたら本望だ。』

まず、間違いなくそう思ったはず。吉本興業の担当者が本心を言ったのか、籠絡するための手練手管だったのかは分かりません。

しかし、そんなことはどちらでもいいことです。結果として東京の漫才師達の心を動かし、反発もなく協力体制を一瞬にして作り上げたのですから。

この最初のセリフを見つけ出すために、どれだけの試行錯誤があったことでしょうか。それは、私たちがチラシのキャッチコピー、案内文の見出しを生み出す過程と同じです。

『最初が全てを規定する!』

ぜひ、疎かにしませんように。

CHUOH TRY+ANGLE

知っ得通信

2009年4月20日発行 編集・発行：中央教育研究所(株) 〒732-0811 広島市南区段原2-15-5 <http://www.chuoh-kyouku.co.jp/>

業界
TOPICS

vol.01 「適正価格と教育の質について」

この数ヶ月の業界トップの言葉集

えいすうグループ 山本千秋 代表
『業界の英知』

こういう厳しい時代だからこそ、資源の乏しい日本は“人財”を育む必要がある。公教育が停滞する中、我々私塾の果たす役割は益々重要になっている。この難局を逆にチャンスと捉え、内部固めはもちろん集客戦略、新機軸など業界の英知を結集することで、私塾のステータスを一挙に高め、経営的にも上昇させることが可能となる。

リソー教育 岩佐実次 会長
『易きに流されず・・・』

安直で危険な“ダンピング”的値下げは教育に携わる塾の本来の姿とは言えない。易きに流されず、独自性のある商品開発と教育サービスの質にこだわりたい。

明光ネットワークジャパン 渡邊弘毅 社長
『適正価格』

全国的な月謝値下げはバブル崩壊後にもあったが、今回はかなり本気でやっている塾が多いように思う。当社では、元々“適正価格”でやってきたので、影響を受けなくて済んでいるのではないかと。

現在、全体の六割強が中学生だが、引き続き、保護者の教育ニーズを掴んでいけば、景気悪化も乗り越えられると思っている。

栄光 近藤好紀 社長
『事業価値』

業界にとり、確かに厳しい時代がきているが、売上と利益だけが経営課題ではないと思っている。サステナビリティ（持続可能性）という言葉をよく耳にする・・・社会が将来にわたって持続的に成長・発展していくために、環境負荷の削減とともに、企業にも経済的側面や社会的側面など調和のとれた活動が求められる。しばらくは、取り掛かっている事業のリンクを高め事業価値を高めていきたい。

中萬学院 中萬隆信 社長
『無償の愛』

人間が究極の選択を迫られた時のことを考えれば、宗教も恋愛も親子の愛情には勝てない。その意味で、塾はこの“無償の愛”に近いものに支えられたビジネスに携わっていると言えるのではないかと。塾で仕事をしている人は、親子の愛以外は裏切られることがあると想定しておけば、何者にも怯えなくてよい。

湘南ゼミナール 木島文義 社長
『日本人らしい人間教育』

環境変化に適応することは、繁栄のための原則のひとつ。これを学習塾の経営に置き換えると“塾の教師が今社会から何を求められているのか？”を常に問い続けることが重要。社会からのミッションを受け止めて塾は、社会の変化に対応しつつ、将来のリーダー的人材を育成する必要がある。そして今、日本人らしい人間教育が塾に求められている。

市進 益田耕次 取締役学院長
『学びの連携』

変化してきた（生徒たちの）やる気を引き出すために、学校の成績も上げようということをお小さな目標として設定している。当社の“めんどろみ主義”を具体化したシステム“フリーウィング”を導入。学びの連携により、個々人に応じた対応が成績アップにつながる。それがさらに、入試という長期的な目標感の指標になる。そのような取り組みがいま、塾が生徒、保護者から求められていることではないかと。



歴史の中に見る教育

『人間の徳性』と『かりそめの不自然な果実』

幕末から明治にかけてアジア、特に日本と中国などで活躍した英国の外交官にサー・アーネスト・サトウがいます。彼は「一外交官の見た明治維新（上・下 岩波文庫）」の中で次のようなことを言っています。

「・・・競争試験の大きな欠点は、人間の徳性（モラル）を考えないところにある。受験者が紳士の作法を心得ているか、また紳士としての感情をいだいているかどうかは、ユークリッドの定理を書かせたり、ギリシャの学者の書いた文章を翻訳させたりする方法で判定できるものではない。そんな方法で知能の試験はできない・・・受験勉強の先生は、試験目当ての数ヶ月の訓練で、かりそめの不自然な果実を实らせる・・・私に言わせれば合格した受験者とは取りも直さず、上手に受験の指導をうけた志願者にすぎない。しかし、大抵の受験者はこうした方法については嫌気をさし、以前は勉強好きだった者でも勉強する気持をなくしてしまう」

これは彼が、イギリス公使としてシャムの首都バンコックにいた1885年頃に回顧録として書いたものです。

『勉強以前の問題』

業界ではいま、「学力中間層の獲得」が急務であり、その指導システムの構築において激しい競争が行われていますが、サトウの指摘した「かりそめの不自然な果実」しか実らせることのできない塾は、今後淘汰される運命にありそうです。また、「人間の徳性（モラル）」についての指摘も、耳の痛いものがあります。紳士の国イギリスの勤勉で誠実な人間性を自他ともに認めるサトウの指摘は時代を超えて的確です。彼の想定している教育とは「リーダー教育」だと思われそうですが、受験指導する塾の仕事全般について考えてみても、彼の言葉は、避けて通れない核心を突いているように思います。

前半でも掲載しましたが、全国最大大手塾の一つ、市進の益田取締役は「学力中間層以下の生徒は、まず忘れ物をしないと宿題をちゃんとするとか、そのような習慣づけから指導しなければ勉強のモチベーションが上がらない」と語っています。「勉強以前の問題」を塾で解決できなければ、学力中間層の生徒を確保して指導し、成果を出すことは困難になっています。今後、大手塾を中心に、学力中間層の指導システムの構築とその進化が激しくなりますが、もしかすると、上記のサトウの言葉が大きなヒントになるかもしれません・・・。

『サトウのDNA』

さて、サトウとは日本の苗字「佐藤」と同じですが、彼自身はスウェーデンにルーツを持つ英国人であり、日本人の血は全く流れていません。しかし、1871年に日本人妻兼（かね）と結婚し、2男1女をもうけました。彼の大好きな日本で最愛の人に巡り合い、日英の血を混ぜることになり、サトウのDNAは今も武田家に脈々と流れています。

長女は生後一年五ヶ月で病没、長男はアメリカ人と結婚して農園を経営しましたが、46歳の時に結核性腹膜炎により死去しました。次男の武田久吉（たけだ・ひさきち）は、東京外国語学校を卒業後、ロンドンの帝国理工科大学、パーミンガム大学に留学し、英国王立キュー植物園で植物学を研究。帰国後の1916年に理学博士の学位を取得して北海道帝国大学などで講師として学生を指導、優れた植物学者として有名です。また、草創期の日本山岳会の指導的人物の一人としても知られています。久吉の娘澄江はサトウの孫にあたりますが、サトウの母校に日本語講座が開設される際に招かれて英国に渡り、これをきっかけとして、武田家とサトウ家の交流がはじまったそうです。

『サトウに学ぶべきこと』

幕末維新の時期には、日本人と外国人の中に多数の偉人が輩出されていますが・・・その中でサトウはあまり目立ちません。しかし、よく調べてみると、彼の上司や仲間たちは皆、勤勉な彼の手記や日記などを借りて報告書に利用しており、彼の観察眼や表現力はただ者でないことがわかります。外交官であるばかりでなく、語学力をはじめ学者として必要な知力や才覚も並外れて秀でており、同僚からだけでなく、日本の政治家や官僚からも尊敬と信頼を集めていました。また、その好奇心はとどまるところを知らず、晩年まで書齋で著作にふけていたそうです。

日本に残した妻や息子たちとの書簡（英語や日本語）の交換も多く、妻や息子たちを優しく気遣う内容でした。現代は外国に行っても携帯が使える便利な時代ですが、同居している夫婦が携帯メールでしか連絡しないとか、遠く離れている家族に電話をかける息子や孫は少ないとか・・・それが「振り込め詐欺」の背景にあるとも言われていますが、手紙のやりとりや電話での連絡などがちゃんときるような教育も今後は必要なのかもしれません。家庭と学校がそれをしなければ・・・また塾の仕事になっていくのかもしれません。

取材 / 記事： 新教育産業監修・月刊私塾界記者 千葉誠一

ご意見・ご要望をお待ちしています。知りたい「テーマ」や内容などについて教えてください。
できるだけ対応したいと思っています。 ご連絡はこちらまで：magazine@chuoh-kyouku.co.jp